

第6回 長野市活力ある学校づくり検討委員会 議事録（要旨）

【開催日時】

日 時 平成 29 年 4 月 24 日（月） 10 時～12 時
場 所 長野市役所 第 1 庁舎 5 階庁議室

【出席者】

（委 員）

山沢委員長、風間委員、小林委員、志川委員、田川委員、藤澤委員、松岡委員、丸山委員、鷺澤委員

（長野市）

近藤教育長、松本教育次長、熊谷教育次長、樋口教育次長副任兼総務課長、上石学校教育課長、倉島主幹兼小中高連携推進室長、新津主任指導主事、唐木主任指導主事、小川係長、近藤主査、中村指導主事、畷田指導主事、千野指導主事、島田指導主事、山岸指導主事、田中指導主事、関指導主事、深澤指導主事、藤森指導主事

【会議次第】

- 1 開 会
- 2 あいさつ（教育長）
- 3 議事
 - (1) 視察の感想について
 - (2) 前回保留となったものの回答
 - ・避難所になっている学校数について
 - ・山梨県の現状について
 - ・教員の意見について
- 4 今後の開催予定
- 5 閉 会

【会議資料】

- 資料 1 避難場所・避難所 市立小中学校指定の状況（平成 28 年度）
資料 2 山梨県 市町村立小中学校数について
資料 3 小規模校の現状
資料 4 平成 29 年度 活力ある学校づくり検討委員会当面のスケジュール案

【発言要旨】

（委員長）

- いよいよ本格的な検討に入りたいと考えている。活力ある学校づくりとは何か、今後の学校の在り方は、そこを基本に方針をたてなければいけないと感じたところである。最初は視察の感想を

伺いたい。

(1) 視察の感想

— 事務局 スライド説明 —

(委員)

- 小規模の芋井小と市街地にある鍋屋田小を比べると、芋井小など少人数のところは先生の目が行き届きやすいが、皆で共同作業ができないのではないかと思った。授業でも鍋屋田小は4人でグループをつくり、議論をし、その後発表する機会があったが、小規模の学校は皆の意見を聞く機会が少なく、かわいそうに感じた。櫻ヶ岡中の合唱も、たくさん生徒がいるから混声合唱ができるのであり、小規模校での指導の難しさを感じた。
- 芋井小は中山間地の学校で空き教室が沢山あり、活用されていないのではないかと思っていたが、教室を使わないと劣化が進むので使うようにしているとお話だった。児童数が減り、空き教室が増えている現状の中、学校に様々な機能を持たせる複合化（公民館等）を考える必要があると考える。地域コミュニティの中で学校を位置づけ、地域の皆さんが学校を使い、児童・生徒との交流が生まれてくるということも必要であると感じた。
- 櫻ヶ岡中のトイレにオムツ替えのコーナーがあり、避難場所としての機能を備えた学校が準備されていることに驚いた。

(委員)

- 様々な視点から、規模により子ども達一人ひとりの意識がどう育つかを見せていただいた。少人数の学校の良さは、一人ひとりの子どもが先生とコミュニケーションをとりながら理解を深めることができる点だが、周囲を見ながら自分を評価することが出来るのか心配である。芋井小は3人で活動しており、自分の視野の中で自分の勉強をしているが、鍋屋田小では自分と周囲の友達を比較しており、この相互学習が子どもにとって大事であると感じた。
- 小規模校になると先生の数が少ないので、先生方が自分をどう高め、先生同士で実践交流し、互いの良さをどう学んでいくのかが難しいと感じた。
- 子どもの数をどうこうすることはできないが、与えられた条件の中で、相互交流・相互評価しながら自己評価することが、子どもにとって大事であると感じた。

(委員)

- 芋井小は人数が少ないことがかえって良いのではないかと思った。人数の多いところでは同じ学年同士で遊ぶが、小規模校では年上の子が年下の子の面倒を見ることができる。これが利点だと感じた。
- 鍋屋田小では専門的な先生がおり発達障害の子にはいい対応だと感じた。
- 櫻ヶ岡中では廊下に社会人講師の案内があり驚いた。新聞記者、医者、職人などに来ていただけることに感心した。

(委員)

- 芋井小を見せていただいたが、鬼無里の小学校も同規模だ。子ども達が1学年2、3人と少ないことは、1人一役で責任を持って授業をやることなのかなと感じた。鍋屋田小では、先生の指示で授業を行うのではなく、先生に助けをいただきながらやっていく姿勢が見られた。
- これから検討していく上で、小規模校と鍋屋田小のような適正規模の学校とは、ある程度区別して検討していただけるとありがたい。

(委員)

- 小規模校は先生の目が届くという点でいいのかもしれないが、子ども達が大きな集団になれないというのは、子どもの成長の中で大きなデメリットだと感じた。中学・高校と大きな集団に入っていく中で、環境の差が大きいと思う。ある程度の規模の学校なら部活動等でも先輩後輩の関係など様々なものが学べるのに対し、小規模校ではこのような経験ができないのは非常にかわいそうだと思う。極端な小規模校では、先生の数や施設の面で経済的な効率の悪さも無視はできないと感じる。

(委員)

- 私の世代は学校が新設され大規模校の時代だったので、小規模校はうらやましく感じ、バランスが大事だと思った。子ども達、保護者、地域の方や先生にとって一番いいバランスの人数がどれくらいなのか。合併ありきでなく、学年何人で子どもがどうなったとか、関わる人数は何人がいいとか、そのような視点で1学校あたりの規模を平均化できるといいと感じた。

(委員長)

- 視察の意見はこれで終わりにするが、いただいた意見は後ほど事務局にまとめてもらう。「避難場所・避難所となっている学校の状況」、「山梨県の現状」、「教員の意見、本日参加しているディレクターの小規模校に対する意見」について事務局から説明する。

(2) 「避難所になっている学校数」「山梨県の現状」「教員の意見」について

— 事務局 資料説明（避難所 山梨県の現状） —

(委員)

- 山梨県の現状について、学校統廃合のプロセス、自然発生的に各市町村で進んだのか、その経緯について教えて欲しい。また、学校がなくなった地域の人口の流出、産業面での変化など、分かる範囲で教えていただきたい。

(事務局)

- 山梨県では平成19年に県としての方向性を出している。いくつかの市に聞き取り調査をした結果、県の方向性を受けている市もあるが、大月市では平成17年8月に大月市立小中学校適正配置審議会に諮問している。北杜市のように県の方針を受けているところもあったが、それぞれの

市町村で実施しているという印象を受けた。

- 地域の様子については、統廃合後に大きく変化したとは聞いていない。また、北杜市では施設の後利用をすぐに行っており、地域がさびれたということはないようである。
- 平成 27 年と平成 22 年の国勢調査の結果の比較で、山梨県全体で人口増減率がマイナス 3.3%、15 歳未満の割合が 12.4%となっている。一番大きかったのが身延町で、増減率がマイナス 12.4%、15 歳未満の割合が 6.9%、大月市も増減率がマイナス 9.6%、15 歳未満が 8.8%、上野原市も増減率マイナス 8.5%、15 歳未満の割合も 9.4%ということで、統廃合のあったところは県の平均より人口の減少が進んだといえる。

(委員)

- 大岡の小・中学校が避難所に指定されていない理由は何か。

(事務局)

- 学校は以前からあるが、その後、土砂災害防止法ができた。それにより土砂災害特別警戒区域となっているため指定されていない。
- 大岡小学校・中学校は 1 つの体育館を共有している。大岡小の近くに支所・公民館があり、そこが避難所になっている。

(委員)

- 先ほど学校の避難場所でオムツの交換ができる場所があった。そのような施設があるところを教えてください。

(委員長)

- 次回に資料として提出する。

(委員)

- 山梨県は人口減少率が長野県より大きいですが、今後市町村で何か方針は示されているのか。

(事務局)

- 今後については聞き取りをしていない。統廃合が進んでいないところはあると聞いているが、これまでの答申の中で進めていると把握している。

(委員)

- 人口が減っていく中、この先どのように方針を示していくかが大事であると思う。

(事務局)

- 大月市は市で示した適正配置を全て行ったためこれで完了となる。他市では地元の了解が得られないので今後慎重に進めていくとの話も聞いている。

- 長野県も調べたが、1村1小学校、1つの村や町に中学校はない状況になっている。そのような地域はほとんどが6学級規模となっている。地形的に見るとこの先どうなるのか難しい地域もある。

(委員)

- 身延町の廃校となった小学校でドローンの会社に貸し出しているところがある。驚くほど安い値段で貸し出していた。このような施設を安い値段で民間にお貸しいただけることは、ありがたいことだと思う。

(委員長)

- 個人的には1村1小学校の状況を見ていただいた方がいいと思うが、近くにあるか。

(事務局)

- 中条の隣の小川村、飯綱町も来年度までに小学校4校を2校にする予定と聞いている。信濃町はすでに1校にして小中一貫校、義務教育学校にしている。

(委員長)

- そのような場合、児童・生徒はどのような手段で登校しているのか。

(事務局)

- スクールバスで登校している。

(委員長)

- それでは続いて教員（連携推進ディレクター）の意見について、資料3について事務局から説明する。

— 事務局 資料3説明 —

(委員長)

- 様々な面でメリット、デメリットがある。ある面から見るとメリットであり、他の面から見るとデメリットもあると思われ、はっきりと分けるのは難しいが、本日の委員会の一番の眼目はこの連携推進ディレクターの意見であり、しっかり議論したいと思っている。

(委員)

- 資料3、3のエについて、小規模校は交流や多様な意見、多様な人材が課題で、ふれあいの中から学び取る機会が少なくなりがちである。交流が一つのキーワードだとすると、同じような規模の学校と音楽会や運動会などの行事を合同で、持ち回りにより実施することは出来ないか教えていただきたい。

(事務局)

- 連携推進ディレクターが各地域に入って一番の問題と覚えることに移動手段がある。昨年度から合同行事等で、バスやタクシーを使い始めている。移動手段をどう確保するか、その予算をどう確保するか、移動には時間がかかるがどうするか等、これらをどうクリアするかが課題となっているが、少しずつだが対応はしている。

(委員)

- 先ほど1村1校とあったが、移動手段を誰が確保するのか。通学の予算を長野市に覚悟して確保させなければいけないかという観点でお聞きしている。子ども達に何を教育するのか。それを達成できないことは良くないと思う。

(委員長)

- 教育学者で規模について研究している人はいないと思われる。ただ、保護者の負担感を考えることは、最適な学校規模を考える上で重要な視点になる。

(委員)

- 子ども達が大人数の中で学習することの良さと、少人数の中で学習した方がいいこともあるので、全ての学校でなくてもいいので、何かできないか考えてみた。現在、私の地区は住民同士が芋井地区と交流している。お互いの良さを学ぼうというところから始まり3年目になる。今年は住民の交流から子ども達の交流に広げたいと考えている。私は教科全てを一緒にすることはできないが、音楽や芸術的なものなど、毎日ではなくてもできるものはあると考えている。

(委員)

- 鬼無里は、平成30年度からの小中一貫した教育に向けて、学校づくり委員会で準備を進めている。現在、ランドデザインもまとまり、市教委で行う小規模特認校としての募集案内もできた。コミュニティスクールの要項も決まり、コーディネーター選任のところまできている。
- 私が中学を卒業した当時は、鬼無里・戸隠・芋井で、運動会や音楽会などの行事を当番制で行っていた。資料3、3のエに行事内容の検討に苦慮するとあるが、このようは行事を小規模校同士で行い、交流していく必要があるのではないかと思う。先ほど移動方法やその費用が大変だといわれたが、小規模校の子ども達にとってはとても重要なことなので、是非とも考えていただきたい。

(委員)

- 資料3、「4 地域とのかかわり」において、小規模校は肯定的な意見が多いと思う。地域に密着した学校なので大きなメリットがあると思う。
- 資料3、「3 学校経営・運営」について、ここに書かれているのは運営に対する先生の負担からきている問題であり、経営という面ではない。先生の意見ではなく、何らかの数字を出していた

だいた方が参考になると思う。経営効率がいいか悪いかという問題である。

- 資料3、「1 授業や学習活動」について、ここに書かれていることは理解できるが、現実問題として、〇〇高校に行くためには、塾はここに行かなくてはいけないということが当たり前になっている。塾や予備校は街中に多くある。そこに通いたいと思いながら、なかなか通えない子ども達が小規模校には多くいると思う。学校以外での教育のギャップというものが大きくなると感じる。

(委員)

- 学校以外の教育ギャップの話があった。今の時代は様々なソフトやタブレットといった機器があるので、時代のテクノロジーを利用するのも一つの方法だと思う。授業で他の小規模校とスクリーンに映し出し意見交換することなどが可能なのか、それとも難しいのか、現役の校長先生にお聞きしたい。

(委員)

- 移動手段の問題がある中で、ICT を利用し交流を深めるのは一つの方法だと思う。実際どれだけ行われているかとなると、設備や準備の問題があり、それほどたくさんは行われていないと思う。
- 小規模校のメリットもデメリットもよく分かる。重要なのはデメリットを解消する手立てがあるかないかということだ。先ほど、交流において ICT を利用する方法があげられたが、これだけでは解消しきれない部分がある。音楽会は当日だけ一緒にやればよいという話ではなく、行事を行うまでに膨大な時間とエネルギーがいる。ICT は人間味のある本当の交流にはならないと感じる。子ども達にとってデメリットを解消する手立てを少しでも考えてあげたい。もっと新しい学校の枠組みを考えていかないと、これだけでは限界があると思う。学校の活力は何なのか、子ども達にとっての教育の質とは何なのか、そこに立ち戻って考える必要がある。

(委員長)

- 新しい学校、仕組みについて委員がお持ちになっているイメージなどあるか。

(委員)

- 発達段階に応じた教育の質の違いということに着目した時、たとえば、年齢の低い子ども達にとっては、デメリットがあっても通学時の安心・安全、居場所、あるいは地域とのつながりが優先されるべきだという考えがあると思う。中学生になった時は、社会性や専門的な学びなど、自立して多様な経験をすることが優先されるべきだと思う。この学校の枠組みが、今までの学校の枠組みとは違う形で作れないかを感じる。私は 10 歳くらいまで、「つ」のつく年齢までは学校が家の近くにあるべきだと思うが、それ以降は新しい枠組みを作っていく必要があると感じる。

(委員長)

- 小学校 3 年生ぐらいまでは住んでいる地域で育て、人数が減っても今までどおりの小学校の体制で育てる。小学校高学年から中学生は、数をそろえた社会集団の中で教育する必要があるという

ことだと思ふ。それでも小学校低学年の段階で2～3人のクラスになる場合どうするか、何かよい方法がないか考える必要があると思ふ。小学校3年生までは、たとえ1人でも教育的効果があるということならそれでよいが、この点が非常に分かりにくいと思ふ。

(委員)

- 小学校1年生から4年生ぐらいまでの間は1人でもいいかといわれると、やはり関わりの中で育てた方がいいと思ふ。複式学級でもいいので縦のつながりや地域とのつながりを作った方がいいと考える。

(委員)

- スクールバスやタクシーで通学している子どもが現実には沢山いる。小規模校をまとめた広いエリアで輸送を考えればよいと思ふ。

(委員)

- 資料にはメリット、デメリットがあり、この場で議論されているのは、メリットはいいとしてデメリットをどうするかということだと思ふ。根本的なところは、小規模校の人数が少ないということが一番の問題だと思ふ。体育や音楽など人が集まらなくてはどうしようもないというところはクリアできない点だと思ふ。どうしても人を集める、児童・生徒を集める努力をしなければいけないと考える。小規模校間で移動するよりも、効率的に考えれば、小規模校から市内の大きな学校へ子どもを運ぶ方が効率的にできるのではないか。経費の面など問題はあろうと思ふが、子どもたちの将来的な多様性を育むというなら、どこか大きな学校に人を集める方がいいと思ふ。
- 学校の適正規模は何人なのかという点は難しいところだ。

(委員長)

- 小学校の6年間を分けてしまう、場所を分けてしまうと学校名も違ってしまふと思われるが、そのようにして小学校課程を修了させることは日本の教育制度で可能なのか。

(事務局)

- 明治から、学校制度が出来てから、子どもがいるところに学校を作ってきた点が今と違うところだ。したがって子どもの少ない学校を分校とし、本校の校長が修了書を出すという形で行ってきた。知識の習得で卒業を認めるという形でやってきたので、おそらく場所が変わっても可能かと思ふ。
- 昔はその学年において何を知識として習得するかが主体であったが、新しい学習指導要領ではそれだけでなく、何をできるようにするのかまで内容が増えている。それが発展すると昔のように何を覚えたからできたという修了のしかたではなく、何を行いどのように考えたかということが目的となる。本来、教育はそうだったと思ふが、そうになると、1年は1年、2年は2年ということではなくなってくる可能性もある。

(委員)

- 小規模校を抱えている地域では、小・中学校を中心に地域が成り立っている。そのような観点からも考えていかなくてはならないと思う。ただ小学校6年間で卒業する、中学3年間で卒業するという考えではなく、それぞれの地域の文化、歴史、そういう大きなものがあるということをこの委員会では考えなければならないと思う。
- バレーボール、サッカー、野球などの集団スポーツは小規模校ではできない。参考に申し上げると、私どもの中学校ではバドミントンを部活に取り入れ、2年連続で全国大会に出場した。昨年は九州で大会があり、各家庭の旅費の負担が大きいことから、住民組織でワンコイン運動を立ち上げた。支所の中の住民自治協議会に募金箱を設置し、協力を依頼したところ、30 数万円も集まった。この資金を利用し、親子、関係者で九州の全国大会に行った。非常にすばらしい絆が生まれた。地域で育った学力、団体行動、大きな大会へ望んだ経験は、社会人となって必ず生きてくると考えている。

(委員長)

- 長野市の学校制度を均一にするといっている訳ではない。私も鬼無里を見させていただいたが、地域の文化の継承ということも考えられており、小規模特認校の取組は一つのモデルになると考えている。
- 自分の地域の小・中学校の教育をどうするかということを地域の方に考えていただくことが、この検討委員会の意味だと思われる。そういう観点で様々な可能性を提案していかないといけないと考えている。委員には一つのモデルを作ったプロとして、一度きちんとお話をお聞きしたいと思う。
- 今後は今ある意見をもとに、専門家の話を聞いた上で検討・意見集約する機会を持ちたいと思う。

(委員)

- 学校教育と社会教育の関係についても検討いただきたい。先ほど複合化という意見があったが、こういう視点も含めて学校の在り方を検討していただいてもいいと思う。

(事務局)

- 様々な視点・観点から意見を出していただければ、学校とは何か、地域とは何かが見えてくると思う。私の経験から、学校が地域の子どもを取り上げてしまい、地域に帰していなかったのではないかと反省している。学校や部活動があるからと、地域の活動に子どもをほとんど参加をさせなかった。今、子どもを地域に戻して、地域と子どもを育てていきたいということを、連携推進ディレクターを置くなどして長野市でも始めた。地域社会と学校の関係、学校ありきで地域なのかということも考えていただけるとありがたい。

以上